

子どもを支えるソーシャルコミュニティ

The Social Community for children

高橋 紀子
福島大学
Noriko Takahashi
Fukushima University

飯嶋 秀治
九州大学
Syuuji Iijima
Kyusyu University

入江 純子
特定非営利活動法人 くまもとスローワーク・スクール
Junko Irie
KUMAMOTO Slow Work School

板東 充彦
跡見学園女子大学
Michihiko Bando
Atomi University

要 約

児童福祉の領域は、社会福祉学を中心に、臨床心理学や社会科学が混在する現場になりつつある。

本稿では、2018年1月に九州臨床心理学会第46回福岡大会(於：福岡国際会議場)で自主シンポジウム「子どもを支えるソーシャルコミュニティ」の概要をまとめた。話題提供では、臨床心理士による「特定非営利活動法人くまもとスローワーク・スクール」での取り組みと、文化員類学者による児童養護施設での個別の児童との関わりについて報告した。その結果、「個人」「グループ」「コミュニティ」の視点を持つ共通性が見出された。子どもを支えるソーシャルコミュニティを作る上で、学術的背景の違いを越えて学び合うことの重要性が確認された。

【Key Words】コミュニティ，子ども，フリースクール，児童養護施設，児童福祉

I はじめに

児童福祉の領域は、社会福祉学を中心に、臨床心理学や社会科学が混在する現場になりつつある。

筆者らはコミュニティ・ソーシャル・アプローチとして、臨床心理学と社会諸科学が学び合う必要性をレビューしてきたが(Takahashi N. et al, 2018), そこで(1)臨床家が既存のコミュニティの危機介入に入るアプローチ(山本, 2000), (2)臨床家が既

存のコミュニティと自助集団を媒介するアプローチ(向谷地, 2009), (3)臨床家が既存の施設内でシステムを形成するアプローチ(田畠, 2011)と整理した。

それを踏まえ、2018年1月に九州臨床心理学会第46回福岡大会(於：福岡国際会議場)で自主シンポジウム「子どもを支えるソーシャルコミュニティ」と題して、高橋・板東で企画し、入江・飯嶋の2名を話題提供者に迎え討論した。

入江は、里山のゆたかな自然の中で、発

達障害, うつ病, および社会的ひきこもりや不登校の人の“まなぶ”“はたらく”を支援する「特定非営利活動法人くまもとスローワーク・スクール」での実践を報告した。飯嶋は, 児童間の暴力に思い煩い安全委員会方式を導入した児童養護施設での個別の児童との関わりから, 臨床家が現場を支える上でどのような学際的活動の課題とのつきあい方をできるのか整理した。

本稿はその自主シンポジウムの概要をまとめ, 子どもを支えるソーシャルコミュニティをテーマに, 臨床心理学と社会諸科学それぞれの立場での実践を共有することを目的とする。

II 話題提供 1

特定非営利活動法人 くまもとスローワーク・スクールにおける支援の実際
—主体性を取り戻し, 「コミュニティ」とつながるプロセスへの伴走—

入江純子

1. 里山コミュニティの中で活動するスローワーク・スクール

6年前, 福岡から熊本に移り, 特定非営利活動法人くまもとスローワーク・スクールの副代表として活動を始めました。このフリースクールは, 里山にある小学校分校跡地を活用し, 地域の地域団体と連携し, 地元の方々に温かく見守っていただきながら運営しています。

里山の環境は, 心の中に誰しも持っている原風景のようなものだと思います。ゆっくり時間が流れ, 自然と豊かに関わり, 仲間と遊び, 体を使った活動を通して, 心に傷を抱えた子どもたちも, かつて自分

が元気だった頃の“心地良い感覚”がどんどん賦活されていくようです。里山コミュニティに抱えられながら, こうした感覚を取り戻していく体験は, 子ども達にとって, 直面する“現実”をくぐり抜けるための緩衝材やエネルギーとなります。そして, 里山と現実と, 双方のコミュニティを行きつ戻りつを繰り返すうちに, この感覚は持続的なものになっていくように思っています。

フリースクールの構造としては, 週2回, 10時から15時30分の活動です(2018年1月現在。その後10時~13時までの活動に変更)。定員は6名程度で小学生から30歳まで受け入れています。1日の流れは, 朝の会に始まり, ラジオ体操, 読書や学習, 午前中の活動, 昼休み, 午後の活動, フリータイムとなります。

活動内容としては, 散歩, スポーツ, 創作(スローワーク), クッキング, 高齢者訪問, 畑や外活動, イベントへの参加など, そうした活動の合間で, 子どもの状況に応じて, 随時, 個人面接をおこないます。

2. 個別, 集団, コミュニティのアプローチ

私が意識しているアプローチとしては, 臨床心理士としてやってきた個人面接だけではなく, 個人はもちろん, その集団, コミュニティの3つを並行して関わることだと思っています。これはフリースクールでの活動に限らず, どのような場でも, 私の臨床のスタンダードです。それは, 人と人, 人と環境との相互作用である「生活体験」を共にしながら, その背景にある「心」に寄り添い, 支えるアプローチである, と考えています。

個人・集団・コミュニティの3レベルのアプローチ

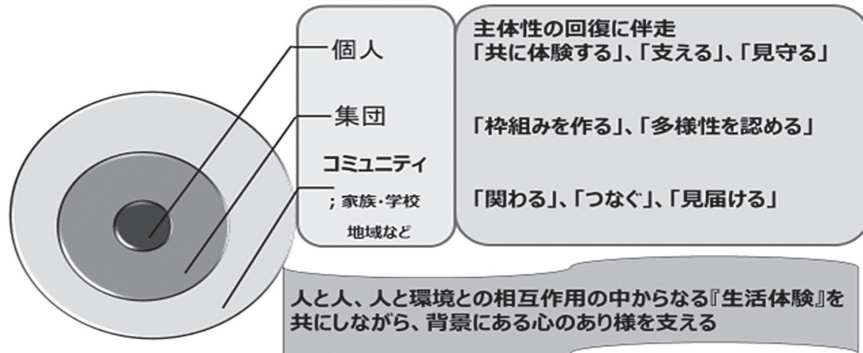


図1 個人・集団・コミュニティの3レベルのアプローチ

3. スローワーク・スクールに来る子ども達が辿るプロセス

フリースクールには、何らかの傷つき体験を抱え、やっとのことで来てくれるという子がたくさんいます。まずは、「よく来てくれたね」というところから関わりがスタートします。その際、最初から子どもの心の世界に踏み込むのではなく、まずは一緒に活動をしながら、ゆっくり関係づくりをします。そして、必要があれば、「ちょっと、お話を聞かせてくれるかな?」というこことで、個人面接をします。子ども達は、面接の枠組みの中で語ってくれることもあります。日々の活動の合間にちょっとした思いをこぼすこともたくさんあります。並行して、保護者の方々とも立ち話ができる関係を作っていきます。そうすると、少しずつですが、それまであまり会話のなかった親子が、帰りの車中、フリースクールでの話をするようになったり、親子の会話が増えていくようです。

安心してゆっくり過ごし、“素の自分”でいられる体験を重ねていくと、子ども達のエネルギーは賦活されていきます。そう

すると、これまで抱えていた思いを、“デトックス”のように、様々な形で表現する子がほとんどです。ある子の場合、ちょっとしたきっかけでワッと泣き始めることが度々でした。そんな時、さあどうするか。私は、ここは勝負どころという感じで、その子と二人で同じ空間を共にし、全身で精一杯の思いを表現する姿に一生懸命につきあいます。最初は手探りでも、何度も繰り返すうち、少しずつ落ち着き方を見つけていくようになります。そうした子が、1年ぐらいつつある日、ふと、「先生。私ね、心がまだ子どもなの。だからもうちょっと、大人にならないかなあと思ってんだ」と言いました。あんなに悔しくて悔しくて泣くしかなかった子がこんなことを語るんだとびっくりしました。

フリースクールの仲間といろいろな活動をする、自分の持ち味が見えてきます。仲間と一緒に何かを頑張ることもあれば、互いに折り合う体験というのでも出てきます。みんなそれぞれ、年齢も違うし、得意なこともあれば苦手なこともあることを前提に、必ずしも“みんな一緒”ではなく、

フリースクールに通う子どもたちが辿るプロセス

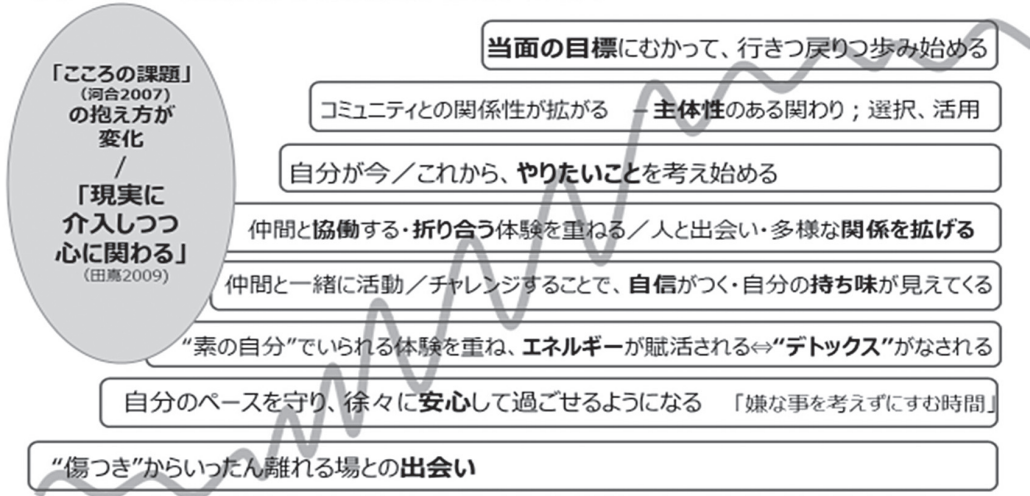


図2 フリースクールに通う子ども達が行くプロセス

緩い感じでの枠組みを大事にしています。

普段の生活コミュニティの中でどうしても対人関係がうまくいかない子が、フリースクールでも、いつも2人対1人の構図を作ろうとすることがありました。そうした場面でも私はすぐに介入せず、「どの子にどう寄り添うのがどのタイミングで必要なのか？」を考えながら、その状況での子ども達の関係性を見ておきます。そして、どうしても一人の子が辛い状況になった時には、傍につきます。嫌な思いをした子、バツが悪そうな子、相手を操作してしまう子…、私も共に“その場”を体験しているからこそ、理解できることが多くあります。「さっき、こんなことがあってたけど、どんな気持ちでした？」という話をゆっくり聞いていくなど、ゆるく集団を見ながら個人を見るといった動きが必要です。

子ども達が元気になってくると、フリースクールのある里山コミュニティがぼつんと切れているのではなく、少しずつ普段戻

る生活コミュニティとの流れができてきます。それを感じ取って、こちらから働きかけます。生活コミュニティの人とは、多くは学校の先生の場合ですが、私はそうした人と必ず連絡を取り合うようにしています。

活動の中でも、子ども達が里山コミュニティの人々と出会う体験を組み込んでいます。動物が好きな子が馬に会いに行く、手先の器用な子がパン屋でパン作りを体験する、物静かな子が地域のお年寄りの家を訪問して一緒に手遊びをする等、その子の得意と、関心のあることと、応援して下さっている地域の方をマッチングしていきます。

例えば、学校そのものに強く抵抗を感じて不登校になった子が、地域のお料理名人さん、木工職人さん、トマトや苺の農家さん、近所のおばあちゃん等、多くの人々と接する中で、手先の器用さを度々褒めてもらったり、顔と名前を覚えて可愛がってもらったりと、一緒に過ごす中で穏やかな表

情を見せるようになりました。仲間達とも楽しそうに談笑するのが日常になったある時、その子がある先生との小学校時代の思い出を楽しそうに話し、「実は今も同じ中学校にいる先生。」と教えてくれました。“今がその時!”と思い、連絡をとってみたいところ、先生も「実は自分もずっと心配していたんです。小学校の頃からよく知っている子なんです」と話してくれました。

その後、その子は将来のことを具体的に考え始め、それを知った先生は、何度もフリースクールで進路相談に応じてくれるようになりました。そのうちに、学費を稼ぐためのアルバイト先を紹介してくれる相談機関の方が具体的な情報を元に面談してくれたり、お金のやりくりについて教えてくれるNPO団体が親子ワークショップをフリースクールで実施してくれたり、他にも進学先の通信制高校の先生、アルバイト先の年上の先輩など、生活コミュニティにいる人々と次々につながっていきました。

こうした展開は、その“流れ”がある時でないとは難しいです。前に、担任の先生が、突然訪ねてきたこともありましたが、子どもがまだ学校は完全拒絶の時期。その訪問は、明らかに先生方の焦り、不安からの動きでしたので、私が間に入って、その子の状況をお伝えしていくことで、直接の関わりを待っていただきました。

このように、普段の生活コミュニティのリソースへ働きかけて、具体的なつながりがいくつかにできていくと、子どものほうにも、コミュニティ内の“使える場所・人のつながりを主体的に使おう、活用しよう”という動きが出てくるように思います。「主体性の回復」と表現しましたが、子ど

も達が里山と生活コミュニティを行き来していくうちに、徐々に二つのコミュニティが重なり、“通路が生まれる”という経験をたくさんさせていただいています。

支援者側の構えとしては、田嶋先生から教わった「現実介入しつつ心に関わる(田嶋, 2009)」という視点を常に意識しています。そして、子ども達がこのフリースクールでの主体性を回復していくプロセスとは、「心の課題の抱え方が変化(河合, 2007)」していくことであると実感しています。

4. まとめ

こういう活動をしていると、様々なところから多様な相談を受けたり、情報が集まるようになります。自分達が積極的に動いて、周りとのつながりを多く持つておくことが、子ども達の支援にも活かされることを痛感しています。心理的な問題を抱えた人には、往々にして社会的な問題も関係しています。そのため、「ソーシャルな課題を解決する新しい装置を社会にプロットしていき、既存の支援機関、NPO法人、行政、企業、地域団体等とネットワークの網目を細かくし、そこから漏れ落ちる子どもや若者を少なくする(入江, 2016)」ことが、傷ついた子ども達が主体性を回復し、再びコミュニティとつながっていくために必要です。この子ども達の回復プロセスに伴走することが、私達の活動であると考えています。

Ⅲ 話題提供2

安全が考えられた施設の子どもたちの成長 飯嶋秀治

1. 文化人類学と臨床心理学で共有できる こと

人類学者の世界は、通常、場所的にはへき地であったりして見えにくいんですが、本日報告する児童養護施設の研究のほうは結構進んでいます。もともとは社会福祉学の領域ですが、この十数年臨床心理学、社会学、最近は哲学の方も入ってきて、学際的な研究領域になっています。

かつて河合隼雄さんが山口昌男さんや中村雄二郎さんと、臨床心理学と文化人類学で協働できると夢見た時期がありました。

「私(河合)としては、自分が考えて臨床心理学でやっていることと(中村雄二郎さんの仕事は)本当につながってくるのです。」「トリックスターといういたずら者の既成のものを壊して新しいものを作り直す、そういう動きと、私が人のかたい心をいっぺんつぶしてもういっぺん新しいものに作り直すとか、心理療法によって人の心は変わっていくというようなことと、そのあたりは非常に(山口昌男さんの仕事と)似通っているのではないか」といったことを書いていました(cf. 河合, 2004)。

僕らの世代は、そうした協働の夢を、現実にやってみたらどうなるのかというのが問われる世代でもあります。臨床心理も一方でコミュニティ心理学という形で出てきているし、僕らがアボリジニのところに行ったときにも心身の問題を抱えている方がかなりいます。

コミュニティアプローチというのはだいたい大まかに分けると、①自生的コミュニティに入っていたり、②あるコミュニティと別の自助集団をつないだり、それから③すでにある制度的なコミュニティ、学校とか施設とかにアプローチをするという立場があります。

私は田嶋誠一先生が創案された安全委員会方式をおこなっている児童養護施設に入ったのですが(③タイプ; 田嶋, 2011)、その後、個別にどんなふうにして子どもたちと関わってたのかというのを検討することで、人類学と臨床心理学、あるいは社会諸科学とのつきあい方にどんなものがあり得るのかについて、今回は話をさせていただきます。

2. 児童養護施設の概要

私の入った児童養護施設は、アクセスの難しい辺境にありました。

そこは漁業を中心とした小さな集落が分散しており、唯一の小中学校のほとんどの子どもたちは施設からの通学でした。

私が入ったのはX年の冬、A自治体の大舎制20人以上いる施設でした。

もともとのきっかけは、女兒への性的問題行動が起こった後に職員さんが入所児への聞き取り調査を行ったところ、入所前後を含めて被害を受けた児童が数多くいることが判明。また施設内で性的問題行動が続けて起こり、起こるたび児童への対応が管理的になって行き、職員の意識や対応にも問題を抱えていたことから安全委員会を導入することになったという経緯になります。

私はこの方式の導入に当たって、一時的な支援者としてX-35日から入った同僚の

あとに1カ月後ぐらいに入り、数カ月間毎週末、それから1年間にわたって少しずつ間隔を空けながらこの施設に通いました。

子ども24人に職員は11人。これは、当時としてはものすごく厚い職員さんの割合です。当時の基準では子ども6人に対して1人です。性的な暴力事件を起こした子たちがほかの施設に移動したのでこのような状況になりました。

3. 文化人類学者と児童養護施設の子も達との関わり

初日。僕は「A先生(職員)のお友達の飯嶋先生です」と自己紹介しました。子どもたちはそれを聞いて実習生だと受け止めたようです。

それからは一日中生活を共にしましたが、例えばお風呂場は暴力に発展しやすいところだと、一緒に入ってみてわかりました。お湯は出る、ひっぱたいたら音が反響する、子どもたちにとってはドラマサイズが簡単な空間になっていて、ここじゃあ確かによく事故が起こるわなあって感じました。

日常生活にこうやって文化人類学的に入ると、子ども同士の関係はすぐ分かりますし、トラブルになりやすい環境とか、子ども一人一人が何が好きで何が嫌いかわかります。悩みだけを聞かなくても、調子悪かったら良い話をして、そこから作った信頼関係で悪いことも共有できるみたいなことができるようだったというのがよく分かりました。

そんなある日、子どもたちを見ていて気が付いたんですが、中学校3年生のG君が学校から帰ってきて、今まで別の人間が

マンガ読んでたのに、パッとマンガを渡したんですよ。それで、あと思ったのが、このマンガを読む順番なんかを調べたら、この施設の子どもたちの力関係が分かりそうだなって思ったんです。この発想ね、いくつかいろんな所に繰り返し使えました。つまり、子どもたちが限られた資源をどう使ってるかっていう順番を見る。

例えば冬だったら、ストーブに当たってる子がいると、ほかの子たちがそこに行くのを怖がるみたいなことがよくあったりするんです。露見する暴力とかけんかとか少ないんですけど、そういうのを見て、その背後に僕らが見えてないところで何かあったな、ってというのがよく分かったっていうのが、2日目のことでした。

安全委員会が発足してからしばらく大きな暴力は止まっていました。だけど、大きな暴力が止まると、加害児が暴力を振るえないことに対するストレスがたまってくるんです。被害時は安心してはじけるようになって、それが加害児にとっては余計ストレスになる。

そういう時、暴力は振るわないんだけど、ぎりぎり暴力的な威圧とかいじめとかに発展しかねないようなことが起こりました。ちょっと気弱な子をゲームから外して、それでみんなでその子のことタコだって言ったりして。こういうのは一緒に立ち会って大人として良くないっていうのはあるんだけど、暴力でもないし、強く止めるほどの何かでもない。これはかわいそうだなと思ったら、やられてるほうの子どもに「おまえ、よう頑張ってるな」みたいな感じで話し相手になったり、その大騒ぎしている子たちのほうに行って別のゲームを

提案するっていう勧誘をしたりしました。

あるいは、日々一緒にお風呂とかも入るのでストレスが僕のほうに向かってくることもあるんです。例えばお風呂に入っていると、おまえジャングル、要するに陰毛ですよ、大丈夫かみたいなこと言われるんで、「おまえこそ小ジャングルじゃないか」みたいなことを言い返してやってるうちに、攻撃的な子とか今まで攻撃されてた子が、飯嶋先生だったら何かを言っても攻撃的にやり返されないんだ、みたいな感じのことを体感したようで。

他方でいじめられる子たちなんかは子どもたちの間で逃げ場がないので、そうすると僕のところに来るんですよ。僕がそれに対して攻撃的に返しをしないと、あ、この人のもとだったらある程度安心して遊べるらしいっていうパターンが身についてきました。

それで2週間目ぐらいに、安全委員会があって大きな暴力止まっていたので、勝敗を決めるんじゃなくて、何かみんなで物を作って、その作ることでみんなが喜ぶような活動はできないかなと思って。

女の子たちとはフラワーアレンジメントを作る活動をやったり、男の子たちとは鳥社会なので周りに貝とかタンポポとか桑の実とかいろんな物があるんですよ。僕、狩猟採集の研究者だからこういうのを見ると、あ、これ食べられると思うんですよ。それで一緒にそこに行って調理をして、調理をした物を施設の夕食のときに共有すると。

これをやると、僕と一緒にこれをやってる間はけんかは起こらないので、そうしている間に加害児と被害児が、あ、この子と

一緒にいても大丈夫なんだって実感をつかんでくれるようになったようでした。

4. 臨床的な現場に文化人類学的に関わる ことの意義

さて振り返ります。今回の発表では、自生的コミュニティの危機に入っていくというようなこと、つまり、施設のある村との間を行き来して信頼関係を作るようなところまではいかなかったですね。それは僕の力量を超えていた気がします。

ただ、田嶋先生がやった臨床心理学と既存のコミュニティに関連する人類学から先の、その外のコミュニティとつなぐちょっとした援助活動は、僕の個別の関わりでできたかと思っています。

臨床的な現場に文化人類学的に関わることで、日常生活の場面では本人との共通の話題を複数、瞬時に把握することができましたし、それから多く子どもたちとの関係をすぐに把握することができました。

他方で、観察したことを随時記述するのは、文化人類学では普通にやったけど臨床じゃちょっと大変なことがあるかなと思いました。

また児童養護施設の場合は、他の子どもたちとの関係を整理させていくことになるので、個々の子どもたちが将来どんなふうな能力を持つようになるかということを考えながら、全体の関係を見ながら関わっていくって形になるので、臨床心理学から言うと、ある意味、ブリーフ・セラピーをいっぱいケースとして抱えているような感じになっていたかと思います。

ただし、心の問題を抱えるカウンセリングとは異なって、児童養護施設では行動の

問題を抱えてる子どもたちが相手になっているので、このために発表者のような文化人類学的な関わりが向いていた可能性もあるし、それから行為が修正されたあとにさらなる心のケアが重要になる事例もあったので、この辺がやっぱり臨床の方たちとの連携の仕方なんだろうなと思いました。

5. 臨床心理学と文化人類学の学術的な共同の上でのポイント

このように振る舞うと、学際的な共同とこのことができるためにはいくつかポイントがあるな、と経験を通じて思います。

一つはまず、優先順位の問題で、どっちの枠が大事なのかをその場その場で決めなくちゃいけないところがあります。例えば文化人類学では、当事者の見方をすごく重視するので、何を暴力とするとかは、本人たちが暴力と言わない以上は暴力とはみなさないんです。だけど、子どもは暴力なんて言葉で訴えませんが。これはやっぱり田嶋先生のプロジェクトに入って、絶対そちらの優先順位崩さない形でやったのが功を奏したところがあります。

逆に、そのように学際的な現場でそれぞれのディシプリンをわきまえて控えていたことを控えないでやってしまった失敗はいっぱいあります。社会学の人たちが施設に入って「今日入って感想どうでした？」って聞かれたら、「うん、なんか施設の人たちに入所者がスティグマ化されてるんじゃないですか？」って職員に言っちゃうとか。そうすると、職員の方たちからしたら気持ち良くないですよ。だから、明日から来なくていいですみたいなことが以前はかなりあったんですね。そこは

注意しなくちゃいけない。

それから、研究業績を優先するあまり人間関係さえおかしくするっていう、これ、ロジャーズと弟子の間でもあったぐらいです。今回の場合、あらかじめ田嶋先生から、これは研究にはならないけどいい経験にはなるからっていう前提があったので、それでこういう活動もできたのかなと思っています。

IV まとめ

児童福祉の領域は、複数の学術的立場が混在する現場になりつつも、お互いの活動をほとんど知らない状況にある。

今回の自主シンポジウム「子どもを支えるソーシャルコミュニティ」では、臨床心理士による「特定非営利活動法人くまもとスローワーク・スクール」での実践と、文化人類学者による児童養護施設での個別の児童との関わりを共有する機会となった。

個人の関わりからグループ、コミュニティに展開するプロセス、もしくは、コミュニティやグループを理解しながら個人と関わる等、「個人」「グループ」「コミュニティ」の視点を持つところには共通性もみられた。

一方で、取り組みの記録・記述の仕方や関わりについては、それぞれの専門性の違いも示唆された。

今後もディスカッションの切り口を工夫しながら、互いの現場での取り組みを共有し、かつ学び合い、より豊かな子どもを支えるソーシャルコミュニティを共に作っていきたい。

文献

- Takahashi, N., Iijima, S. and Bando, M. (2018) A Review of Community and the outlook of Community Social Approach, *Journal of Modern Education Review* 8(6), 452-457.
- 田嶋誠一(2009). 現実に介入しつつ心に関わる多面的援助アプローチと臨床の知恵. 金剛出版.
- 田嶋誠一(2011). 児童福祉施設における暴力問題の理解と対応. 金剛出版.

- 河合隼雄(2004). 深層意識への道. 岩波書店.
- 河合隼雄(2017). 心理臨床の奥行き：初回面接について. 新曜社.
- 入江真之(2016). 精神保健福祉士資格で広がる多面的アプローチ援助のカタチ. 田嶋誠一編. 現実に介入しつつ心に関わる：展開編. 金剛出版.
- 向谷地生良(2009). 技法以前. 医学書院.
- 山本和郎(2000). 危機介入とコンサルテーション. ミネルヴァ書房.